

形

forme

特集

中学校美術の学びを考える **その3**
新しい教科書の使いかた

美術 1

ほほ笑んでいる？
悲しんでいる？



俳優
深川 麻衣さん

教科書の表紙
作品を解説する
QRコンテンツを
本冊子の裏表紙で
紹介しています！

美術との出会い



三原色+白が
見どころの一つ。



美術史家
小林 頼子さん

描き方が
他の作家と違う。

画家
生島 浩さん



未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

本資料は、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

日本文教出版情報
詳しくはWebへ！

日文 検索



令和3年(2021年)度版 中学校美術科 内容解説資料として扱われます。

QRコンテンツで広がる

新しい
表紙の使いかた

新しい教科書の裏表紙には表紙
作品に関連する動画を収録した
QRコードを掲載し、鑑賞活動を深
められるようにしました。各学年
の分冊テーマに即した
内容のため、オリエンテーション
や題材の導入として
も活用できます。



美術 1

「真珠の耳飾りの少女」

ヨハネス・フェルメール

中学校で美術部員だった深川麻衣さん、写実人物画を描く生島浩さん、フェルメール研究の第一人者である小林頼子さんに作品の見方を伺いました。生徒の見方や感じ方を広げる鑑賞活動の導入にもなります。



美術 2・3上



「緑響く」

東山魁夷

自然と向き合い心情を投影して描く東山魁夷の考え方を紹介します。本作に込められた思いを、モチーフとなった池の映像や、モーツァルトのピアノ協奏曲の音色、作者の言葉などから探ります。



美術 2・3下



「オキュラス」

サンティアゴ・カラトラバ

「何の施設だと思えますか？」という問いかけから始まり、現地のニューヨークで撮影した映像で建物の形や機能を紹介します。つくられた背景や作者の願いなども併せて学べます。



小 | 中 | 高 |

形 forme No.321-2020

日文教育資料 [図画工作・美術]

令和2年(2020年)5月14日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33507

日本文教出版 株式会社
<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18 7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

「forme」は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として一九五六年に創刊されました。以来六〇年を超える長きにわたって、美術教育に寄り添って刊行を続けています。「forme」という書名は「形と人間形成をシンボライズしたものです」ともたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。

Index No.321

- ② 特集 中学美術の学びを考える その3
新しい教科書の使いかた
・造形的な見方・考え方 鷹野 見 × 森元勇気
・QRコンテンツ 大橋 功 × 花里裕子 × 大黒洋平
- ⑫ 子どもの見方 中学生編
|第9回| 情報、プロセス、文脈を読む 奥村高明
- ⑭ 村上センセイが行く! 全国美術室探訪
|第8回| 新潟市立木戸中学校 渡邊敏尚
- ⑱ インタビュー
画家 池田 学
- ⑳ 学びのフロンティア(小学校)
セレクトショップ 石井真里
- ㉒ 学びのフロンティア(中学校)
アートカードでよろしくね 貝原訓子
- ㉔ まず見る
|第24回| 「教科書の絵」を考えてみる 成相 肇
- ㉖ ミュージアム・エデュケーションのトピラ
横浜美術館 端山聡子
- ㉗ 生徒作品解説 中学生の私の見方
- ㉘ QRコンテンツで広がる 新しい表紙の使いかた

表紙説明

新しい教科書の美術1には、3名の方に表紙作品「真珠の耳飾りの少女」についてインタビューした動画を収録。詳細は裏表紙(28ページ)をご覧ください。



アートディレクション：清水 一(東京矢印)
編集・ディレクション：山本武義(東京矢印)
デザイン：東京矢印
特集テキスト：坂井 修、小安英輔
特集写真：市来朋久

ページ下部に、それぞれのコーナーと校種の関連性の強さを表示しています。各企画は小・中・高全ての校種に関連がありますが、特に関連の強い校種を大きくしています。

例： | 小 | 中 | 高 | 特に中学校に関連の強いコーナーを表します。

新しい教科書の 使いかた

2021年4月、中学校学習指導要領の改訂による新しい教科書に変わります。

生徒が未来を生きるために必要な資質・能力を、学年の発達に合わせて育むことができるよう、

アナログとデジタルを融合した新基軸の中学校美術教科書を実現しました。

この新たな教科書を、どのように使うのか? どのような力が身に付くのか?

代表著者と現場の美術科教員の対話を通じて、新時代の美術教育を紐解きます。

特集



造形的な 見方・考え方を育む 鑑賞題材の使いかた

新しい中学校美術の教科書について、
教育現場を熟知する二人の対談が実現。
代表著者として編集に携わった鷹野晃先生と、
美術科教員として教壇に立つ森元勇氣先生が、
鑑賞教育において、造形的な見方・考え方を育む
「教科書の使いかた」を語り合いました。



神奈川県 厚木市立睦合中学校 教諭
森元 勇氣 もりもと ゆうき
多摩美術大学を卒業後、非常勤・臨時教員を経て、
2007年より正規教員として勤務。
以来2校を歴任し、2013年より現職。令和3年度版中
学校美術教科書の著作者として携わる。

山梨県 北杜市立明野中学校 校長
鷹野 晃 たかの あきら
山梨県内の中学校美術教諭、山梨県教育委員会図画
工作・美術担当指導主事を経て現職。令和3年度版中
学校美術の教科書の代表著者であり、鑑賞の題材
を主に担当。

国宝 火焰型土器 十日町市博物館蔵

forme No.321 ④

実感的な理解ができる！

折っても
いいんだ～



森元 新しい教科書は、A4をワイドに大きくしたサイズで、手にしたときの重みやページをめくると新鮮な驚きを感じられます。これは、美術の教科書の醍醐味ですね。

鷹野 そして『美術1』のページをめくっていった先には、観音開きの仕掛けとともに「屏風」の題材が登場します。こちらの印象はいかがですか？

森元 まず、見開きで展開する『風神雷神図屏風』に「あー」「なにこれ!？」と驚く生徒の様子が期待できますね。さらに観音開きのページを開くと、四ページ分のワイドな誌面に金箔の『燕子花図屏風』が一気に広がり、目だけではなく首まで動かして見回すでしょう。

鷹野 そうなったときに、見ていた世界や空間の広がりを実感として味わえますよね。作品の見方や感じ方を深めるためのアイデアの一つと言えます。

立体に立ち上がる紙面。

森元 それに、タイトルの「折り曲げて味わう」を

見ただけで、「この教科書、折れるの!？」となりそうですね。Point1参照

鷹野 そこもポイントで、教科書は本来、傷つけるべきものではないという意識があると思うのですが、今回はあえて屏風を折り曲げて味わうという試みをしています。先生ならどのように指導しますか？

森元 「どう折ったらより美しく、カッコよく見えると思う?」と折り方から考えさせます。身近な存在ではない屏風でも、実際に折ったり、クリップなどで固定して立て掛けてみたりすることで親近感がわき、機能面や存在理由などにも視点が広がります。3ページ参照

鷹野 ページを開いたときは違った驚きを実感できそうですね。

森元 実は以前、小さな量のシートの上に屏風の図版を置き、ライトアップした空間をつくって鑑賞したことがあります。生徒たちはタイムスリップしたかのようにさまざまな気付きを得ていました。今回の「屏風」の企画には、紙の厚みやサイズ感も含め、教科書の使い方として新しい可能性を感じますね。

鷹野 工夫次第で、平面の教科書でも空間を実感する深い学びを体験できますね。今後の鑑賞の大事なポイントになりますし、一年生から美術への好奇心を育むことができれば、その後の成長も期待できると思います。



このページだけ厚いぞ

Point 2

表現と鑑賞が一体的に学べる教科書づくり

発想や構想に関する資質・能力と、鑑賞に関する資質・能力とを総合的に働かせて学習を深めるよう新学習指導要領で示されたことを受け、インデックスに新マークを配置。表現と鑑賞が相互に関連していることがひと目で分かり、授業展開がしやすいよう配慮しました。

表現
鑑賞

Point 1

導入のヒントにもなる印象的な題材タイトル

「サブタイトル」で活動や目的を示し、「メインタイトル」で生徒の心をつかむ。問いかけ型の主文も活用して、自分たちが学ぼうとしていることへの生徒の意欲を引き出しながら、多様な授業展開が考えられるタイトルを目指しました。

折り曲げて味わう
屏風、
美のしかけ



こんな大きさなんだ〜

原寸大の『火焰型土器』。

鷹野 『美術2・3下』の『火焰型土器』のように、原寸大で作品を掲載したページもつくりました。**森元** 「こんな大きさなんだ！」と手を広げる姿が浮かびますね。実際の授業でも、原寸大のリアリテイによって「ここは指で押した跡かな?」「持ち上げるなら、どこを持つだろうか?」と細部への気付きが生まれることを実感しています。

鷹野 あたかも目の前に原寸大の『火焰型土器』が現れて、その裏側にまでも手を伸ばし確かめているような感じですね。美術では生徒がこうやって手で考えるような姿によく出会いますよね?
森元 ええ、特に最近はVRなど映像技術の発達のおかげ、立体的なイメージを容易にもてる生徒も多いので、五感を刺激する学習は大切ですね。立体作品の鑑賞ならではの学びができそうです。

色彩の指導を深められる『浪裏』。

鷹野 美術の題材はタイトルも大切で、『美術2・3上』の『浮世絵はすこい』はどう思われますか?
森元 まず「何がすこいの?」という生徒の反応です。その疑問から期待感を高め、広げていけそうです。観音開きページの『神奈川沖浪裏』は、色の再現性がすばらしいですね。有名な作品だけに「こんなに濃い色だったんだ!」と再認識でき、波しぶきの激しさや力強さの見え方も変わると思います。

鷹野 ここは特色も使って六色印刷とし、色彩の豊かさから版画の技法的な側面にも気付きを与えたいと考えました。「これって版画なの!?!」という驚きが新たな問いとなり、主体的な鑑賞につながると思うのです。

作者の心に寄り添う、深い鑑賞。

森元 『美術2・3下』の観音開きページは、「あの日を忘れない」というタイトルが非常に印象的です。サブタイトルに「美術の力を考える」とあるため余計に「どういうこと?」となったところで、東日本大震災を機に描いた池田学さんの『誕生』と出会う。多くの生徒は綺麗な桜の絵と最初は認識し、そのうち視点が小さくなって、ぶら下がった電車や人、波など細部のモチーフに気付くので、さらに虫めがねで鑑賞するのもよいですね。

鷹野 虫めがねで? それは面白いですね。
森元 そのうえで次のパブロ・ピカソの『ゲルニカ』を見てみると、人や馬のモチーフから徐々に凄惨な描写を感じ取り、戦争というキーワードが出てきます。そこで改めて『誕生』を見直すと「波じゃなくて津波?」と鑑賞が深まっていき、作者の心情に寄り添っていく。その視点のまま、また『ゲルニカ』へと相互に視点を行き来させるという授業は有意義だと思います。

鷹野 すばらしいですね。中学生に『ゲルニカ』を見せると、奇妙な絵という先入観をもたれがちです。でも、異なる二つの作品を「あの日を忘れない



これが北斎ブルー!

『富嶽三十六景』より神奈川沖浪裏 葛飾北斎 すみだ北斎美術館蔵

造形的な見方を身に付ける。

い」というテーマでくぐることで、湧き上がる作者の感情やそれを表現せざるを得ない強い魂の叫びに着目できるのではないのでしょうか。

鷹野 今回の教科書では、授業をする上でのポイントなどを「学びの目標」として学習指導要領に沿った三つの柱でまとめました。また、美術でなければ学べないこととは? というヒントを「造形的な視点」として全ての題材で簡潔に明記しています。**Point 3,4参照**

森元 教科書を使用する先生と生徒、双方にとって重要なキーワードですね。授業を行うのは美術教師だけではないという現状もありますから、

それらを端的に示してくれるのは非常に分かりやすいと思います。私個人としては、生徒との対話を特に大切にしていますから、対話によって鑑賞を深めていくためにも、この「造形的な視点」は重要だと感じました。その意味では、初めて教科書を手にしたとき、表紙との出会いからも対話は生まれますし、『美術2・3下』の文化遺産の修復をテーマにした題材でも、造形的な視点で生徒たちが意見を交わす授業はできると考えています。

鷹野 なるほど。今回の教科書は、そのように現場を知る先生が生徒から学んだ要素を盛り込み、組み立てた構成とも言えます。この教科書を通じ、鑑賞教育や美術文化について、中学生がより主体的に考え、理解を深めていくことができると期待しています。



タイトルがいいね!

虫めがねで何が見えるかな?

Point 4

「何を学ぶのか」「何を評価するのか」を整理

【学びの目標】

- 形や色彩、全体の具の使い方を工夫する
- 身近な場所のイメージを練ったり鑑賞する
- 気になる場所を組み合わせる

「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力という三つの柱に対応した目標をタイトル周りに配置することで、生徒自身にとってこの題材で何を学ぶのが明確になるとともに、評価のしやすさにもつながります。

「造形的な見方・考え方を働かせ」について 『中学校学習指導要領解説』より

造形的な見方・考え方とは、美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことが考えられる。(中略)
造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの動きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点のことである。

Point 3

美術科ならではの見方を育む「造形的な視点」

造形的な視点
作者の表したいことと、構図や色の使い方に着目してみよう。

教科目標にもある造形的な見方・考え方を捉える要素として、題材の中心発問を新たに設けています。図版に添えられた具体的な問いかけが、まず押さえておきたいポイントを示すとともに、生徒の主体的な取り組み、他者との対話や学びを深めるきっかけとなります。



自分で探して、気付き体験!

大黒 コンテンツの数や種類も豊富ですね。生徒作品の彫刻をタッチ操作で360度回転させて鑑賞できたり、建造物などは動画で空間的に見られたり、屏風をろうそくの火で鑑賞している動画もあったり。スライドショーやアニメーションなど、デジタルならではの工夫が凝らされていますね。これまでにない気付きや学びを引き出せそうです。**Point 7 参照**

大橋 『美術2・3下』では東日本大震災を描いた池田学さんの『誕生』の全図の隣に、クローズアップした一部分を原寸大で掲載しています。これからの部分から探すことで、部分から全体、全体から部分へと視点が変わり、さらにQRコンテンツの高精細画像で、精緻な描画を細部まで鑑賞できます。こうした鑑賞を可能にするのも、QRコンテンツの力ですよ。

多様で主体的な学びが実現。

大橋 これらのQRコンテンツは、どのタイミングで、いかに活用するのがいいと思いますか？
花里 生徒にとってベストなタイミングは、その子が勝手に見たいときですよ。授業で先生に見させられるのではなく、自宅などで「見たい」と思ったときがその子のゴールデンタイムなんだと思います。
大黒 私も授業中に一斉に見るのは、ちょっと違うと思います。授業ではQRコードに気付かせるだけでいい。自宅でも、家族と一緒に閲覧できる。

きますし。
大橋 そう、家族の団欒の中で学びが生まれてくると思うので、ぜひ保護者の方とも見てほしいですね。授業で見ると、プロジェクターで見ると一緒。それぞれの生徒がそれぞれのタイミングや場所で見られるのが、QRコンテンツの価値だと思います。その意味で多様化に対応しています。

花里 必要な箇所を見直せるのも、QRコンテンツのよさですよ。分からなかったところ、聞き逃したところは見直し、その生徒のスピードで繰り返し見てほしい。繰り返し見られるという点では、題材ごとの技法(例えば『電動糸のこぎりの準備』などの説明動画に関しては、美術室のモニターで繰り返し流してもいいですね。生徒たちの確認や、知識の定着につながると思います。

新しい学びのスタイルを生む。

大橋 今回の教科書を生徒の立場から見ると、気付いた点がありますか？
花里 『美術1』49ページの「アイデアのデータベースをもと」のコラムなど、生徒たちの自学自習に役立つ情報やヒントが満載ですね。従来の教科書は生徒が自学するには使いづらい面もあったのですが、この教科書なら生徒たちが主体的に見ることで、自分で気付きを得られるし、教師は自分らしい授業に生かせると思います。
大黒 題材の分類や学びの目標、造形的な視点を充実させました。**Point 9 参照**



どんなコンテンツなのか、ワクワク
 ...
Point 8 参照

花里 デジタルと連動したこの教科書をきっかけに、生徒が自分の作品をデジタル画像にしてタブレットを制作ノートやポートフォリオにするなど、いろいろなアイデアが生まれてきそうですね。
大橋 制作のプロセスを記録してアーカイフすれば、個人、班、クラス、学年、学校単位での情報活用や、デジタルミュージアムも可能になりますよ。
大黒 多様化する現代の美術を子どもたちに伝えるにも、美術教育における教科書とQRコンテンツの連動は必然ですよ。教師と生徒の対話から、常に新しい学びのスタイルを創造していく。それが、これからの時代の学びのあり方なんだと思います。



Point 7
紙面の立体作品を自由に360度鑑賞
 QRコンテンツならではのメリットを生かし、モニターのタッチ操作で紙面の立体作品の360度鑑賞を実現。見たい角度や距離から自由に鑑賞し、動勢や質感、細部の工夫まで捉えることができ、表現活動にも役立ちます。

Point 8
巻末資料や動画などに導く参照マーク
 題材に関連した学習内容につながる参照マーク。主に巻末の「学びを支える資料」に誘導します。QRコンテンツとの連動で、材料の種類や制作の手順、さまざまな技法などを見たいときや必要ときに学ぶことができます。

Point 9
技法を動画と巻末資料で学ぶ
 表現活動をよりサポートできるように、巻末資料にリンクしたQRコンテンツで技法の流れが確認できます。



[アクリル・紙/39×54cm]
令和3年度版 中学校教科書 美術2・3下 P.21掲載 (題材名「きらめき ゆらめき」)

1 情報

- 全体**・学校の廊下に、人物の後ろ姿。
- 通路**・廊下の先の左右の通路から光が差し込んでいる。
- ・トーンとタッチをそろえた細い筆の重ね塗り。
- 人物**・骨格、筋肉の付き方、ポーズなどが少し不自然。
- ・窓からの光は反映されず、青い影のような状態。

2 プロセスの想像

- ①見たままの造形ではありません。下絵の段階から意図をもって描かれたのでしょう。
- ②何度も塗り重ねられた筆跡から、自分の思うような光や影、色彩などを表すための試行錯誤が伝わります。

作品名：誰もいない学校
作者の言葉：大切にしたいのは一筆一筆、光と影を追いかけることです。人を描いたのははじめて。絵の中で動き出すような力強い魂を込めることができました。

3 文脈

「一筆一筆、光と影を追いかける」それがこの子の主題でした。青い人影は、微妙に複雑な「私」の感情かもしれません。自分の世界を大切にしたい中学生の成長と、アニメや絵本などに見られる映像的な文脈が交錯しています。

まとめ

作品はいずれも「対象を見つめて感じとったことを表現する」題材です。でも、それぞれの主題や文脈は異なります。身の回りの形や色彩からイメージを発見した「新しい世界へ」、多角的な視点で身近な文化を捉え直した「おひなさまから見た景色」、描く行為を突き詰めて世界をつくり出した「誰もいない学校」。題材を提案する際には、中学生らしい発達と、その背景に広がる多様な文脈を踏まえながら、その子らしい資質や能力が十分に発揮できるようにしたいものです。

文：奥村高明

日本体育大学
児童スポーツ教育学部
教授

1958年宮崎県生まれ。小中学校教諭、美術館学芸員の後、文部科学省教科調査官として学習指導要領の作成に携わり、現職。日本文教出版Webマガジン「学び!と美術」執筆者。

〈今号のひと言〉……
孫と「おしりたんていごっこ」。何か隠して探そうですが、絶対に見付けてはいけません。「…ですね」「…かもしれません」とプロセスを遊びます。う〜ん深い……。



[アクリル・紙/36×52.5cm]
令和3年度版 中学校教科書 美術2・3上 P.13掲載 (題材名「視点の冒険」)

1 情報

- 全体**・上から見下ろした構図。
- ・画面いっぱいにひな飾り。
- ひな壇**・ひな壇の段差に写真で見られるようなあおり。
- 人形**・人形の中心軸を延長すると、1点に結ばれる。
- ・お内裏さまとおひなさまは台座だけ。

2 プロセスの想像

- ①あおりや中心軸などから、写真を基に描かれた絵だと分かります。家に飾ってあるひな飾りを撮影したのでしょう。
- ②大切にしたのは「人形」より「視点」です。なぜお内裏さまとおひなさまが描かれていないのでしょうか。

作品名：おひなさまから見た景色

作者の言葉：小さいころから大好きな自分のおひなさまが、もし生きていたらどんな世界が見えているのかを知りたくて描きました。

お内裏さまとおひなさまが描かれていなかったのは、「おひなさまの視点」のせいでした。ひな人形への思いから、自分の視点をひなさまに埋め込むというアイデアを思い付いたのです。中学生らしい思考の発達と、表現を通じた我が国の伝統文化への深い理解が見えます。

中学生ともなると形や色彩だけでなく、文化、歴史など多様な文脈も描かれています。発達の段階に応じた表現の違いも見られ、中学生の絵を見る上では、情報を整理し制作プロセスを想像するだけでなく、作品に込められた文脈や主題を読み取ることが大切です。



[アクリル・紙/38×54cm]
令和3年度版 中学校教科書 美術1 P.16掲載 (題材名「なぜか気になる情景」)

1 情報

- 全体**・斜めの構図、植物と排水溝。
- ・葉の一部が格子の外に出ている。
- 植物**・排水溝の中と外で葉の明るさや茎の太さが違う。
- 排水溝**・手前の暗闇と葉がコントラストになっている。
- ・格子は詳細だが、大きさや比率は微妙に異なる。

2 プロセスの想像

- ①形のずれからスケッチが基になっていることが分かります。対象を探しながら、ここに立ち止まったのでしょう。
- ②暗闇から光のある方向に植物が伸びていることに心引かれ、それを主題に描いたのでしょう。

3 文脈

作品名：新しい世界へ
作者の言葉：「出られた！長かった！」みぞの中から葉っぱが外に向かって生き生きと生えていて、その力強さや美しさを表現したいと思いました。
主題は、植物の「力強さ」や「美しさ」でした。そこには、随筆や俳句などに見られる小さきものや弱きものに心を寄せる我が国の文化的な文脈や、成長期や思春期という発達的な文脈が反映しています。



「対象を見つめて感じとったことを表現する」
発達に配慮した題材設定

子どもの絵を読み解く
3ステップ

1 情報を整理する

作品名や作者の言葉などを脇に置き、できるだけ心を空っぽにして絵を見て、情報を整理します。事実だけにとどめ、見る側の思い込みや印象を抑えます。

2 プロセスを想像する

自分の見付けた情報から子どもの描いたプロセスを想像します。

3 文脈を読む

作品名や作者の言葉などを参考にしながら、さまざまな文脈をたどり、表現の意図を読み取ります。



村上センセイが行く!

全国美術室探訪

隣の中学校は何をしているの?



美術教科書著者である村上尚徳先生が全国の美術室を訪問。
“村上先生視点”で、現場の工夫や先生方の美術教育への思いに迫ります。

第8回

新潟市立木戸中学校
(実践時)

わたなべとしひさ
渡邊 敏尚 先生

美術室はシンプル・イズ・ベスト! 空間を最大限に活用した舞台演出で魅せる。



渡邊敏尚
新潟県佐渡市出身。新潟大学大学院修了。美術を専攻しながら国語の免許も取得し1994年より教壇に。教頭となった現在、国語を担当しつつ、新潟市認定の美術マイスターとして美術教育の向上活動に尽力。2020年4月から新潟市立小新中学校で勤務。

明るく一変した美術室で、生徒たちの新たな一面を発見

村上 美術室に入ると、掲示物がないとてもシンプルな空間に驚きました。これは教頭である渡邊先生のお考えですか?

渡邊 美術科の先生の意見を聞きながら、私が監修しました。以前は壁が緑色で、窓が収納棚で塞がれていたためとても暗い美術室だったのですが、開校五〇周年の大改修を機に壁を白く塗り、棚を撤去しました。おかげで明るい美術室になり、生徒たちの表情も明るくなりました。
村上 今日はその明るくシンプルな空間を生かした、大変面白い演出が盛りだくさんの抽象画

の鑑賞授業を拝見させていただきました。

渡邊 私は普段二年生の国語を教えているのですが、今日は特別に同じ二年生の美術も指導させていただきました。今日の授業で目指したのは、三年生の美術

につながるように「美術の答えは一つではない」という気付きを提供することです。そのために、さまざまな演出を考えました。でも、結果として大切な気付きを得たのは私のほうかもしれません。国語ではあまり自分の思いを表現しない生徒が、自由に意見を言い、ワークシートにも積極的に書き込む姿に驚きました。美術作品を通して対話の効果を実感すると同時に、自分の

国語の授業を見直すきっかけとなりました。

授業の展開や活動に合わせて、空間を最大限に生かす

村上 授業の展開に合わせて、生徒の活動スペースや掲示物を変えていく手法はとても印象的でした。ロール紙に印刷した抽象画を梁に仕込んでおいて、授業の後半で一斉にオープンする演出もインパクトがありましたね。
渡邊 美術室を真っ白なキャンヴァスと捉え、どんな授業をしたら生徒たちが面白いと感じるか。それを大切に、美術室の空間活用まで考えて授業全体を組み立てていきました。

導入では全体で考えを共有したかったので、生徒を教室前方に集めました。その後ペアで対話し、考えを深めながらホワイトボードに絵を描きます。次に教室後方に集まり、各ペアのホワイトボードを見ながら意見交換をします。最後は、教室側面の天井から登場した大判の抽象画作品を、自由に歩きながら見てワークシートを記入する。このように活動の単位が個、ペア、クラス単位に変化するのに合わせて、美術室という空間を最大限に活用しました。舞台演劇で場面が切り替わるように、授業の展開に合わせて活動に適したスペースを使うようにしたのです。

村上 何もない空間から始まった授業が、最終的には作品に彩られた華やかな空間に変化しました。授業終わりに教室全体を見渡すと、その日学んだことの振り返りにつながるのもいいですね。

壁面掲示物は計画的に発信
美術室の有効活用を考える

渡邊 本校の美術室は、改修を終えたばかりの無垢な状態です。

▼ 各ペアでホワイトボードに描いた抽象絵を、教室後方に展示。みんなが集まって対話することで、多様な発想や表現、個性を理解する。



▲ 梁に仕込んだロール紙に、大判の抽象画9作品を印刷。生徒は移動しながら作品を間近で鑑賞し、個々の気付きをワークシート上で言語表現する。



▶ 改修から間もなく、掲示物が一切ない美術室。明るくシンプルな空間は、授業の展開に合わせてスペース活用や演出を可能にする。



▶ 授業の導入では、黒板とプロジェクターを活用。テンポよく多様な作品を提示することで、生徒の興味を引き出していく。

探訪を終えて...

掲示物がほとんどない美術室は、あまり見たことがありませんでした。しかし、授業が終わると教室の後ろには小さなホワイトボードが並び、窓側の梁からはロール紙に印刷された数枚の抽象画が垂らされ、教室の中が掲示物で埋まっていた。普通性のある掲示物を長期に掲示することも意義がありますが、教室全体を白いキャンヴァスのように捉え、そのときの授業や必要な時期に、タイムリーに提示するという方法も効果的だと思いました。

今日の一枚 /



ペアで対話しながら絵を描き、想像を膨らませることで鑑賞がより深まる。

授業の様子や対話の動画は
日文チャンネルでご覧いただけます。



むらかみしげる
村上尚徳

IPU・環太平洋大学副学長
次世代教育学部教授

岡山県出身。岡山市立中学校教諭、岡山県教育庁指導指導主事を経て、文部科学省教科調査官、及び国立教育政策研究所教育課程調査官に。平成20年の中学校美術、高等学校芸術(美術・工芸)の学習指導要領改訂に携わり、2011年より現職。



誕
生

ペン・インク・
透明水彩・紙
300×400cm
2013～16
佐賀県立美術館蔵

いけだ まなぶ
池田 学
佐賀県
1973～

東日本大震災の惨状を、海外から見てのことしかできなかった自分の無力感。
あの日をきっかけに描いた「誕生」は、絶望からの再生であり、
僕自身の再生でもあったのだと思います。

詳しい解説は
こちらから▼



@IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery, Tokyo/Singapore, photography by Eric Tadsen for Chazen Museum of Art



広大な画面に
一ミリ以下のペン先で線を重ね
壮大な物語を描く池田学さん。
池田さんの「誕生」が掲載される
令和三年度版 中学校教科書
美術2・3下「あの日を忘れない」は、
未来へ思いをつなぐための
美術の力を考える題材です。

interview

画家
池田学

「子どもの頃の池田さんは、どんなお子さんだったのですか？」

身体を動かすことが好きで、小中学校時代は野球やサッカーをしていました。絵を描くことももちろん好きでしたが、一心不乱にずっと描くというタイプではなくて、自分が好きなものを描くという感じです。例えば昆虫を見たら「カッコいい！」と思います。また、魚釣りをしたり、昆虫を捕ったり、自然で遊ぶのも好きでした。特に好きだったのは、自然の小さな部分を覗くことでした。一本の木の間があつたり、穴が空いていたりしますよね。昆虫はこういうところに隠れているから、目を凝らして奥を覗き込むんです。すると、チラッと触覚が見えたりして、これがすごく楽しかった(笑)。そういう体験の積み重ねで、ものに近づいて細部を見るのが好きになったのだと思います。これが僕にとって絵を描く醍醐味になっているので、鑑賞する人にも同じように楽しんでもらえたらうれしいです。

「子どもの頃の体験が、作品に生かされているんですね。さて、今回教科書に掲載される池田さんの「誕生」は東日本大震災がきっかけで描かれた作品だと伺いました。」

震災が起きたとき、僕はカナダのバンクーバーにいました。テレビに映る光景に強い衝撃を受け、最初は日本で起きたことだと信じられなかったのですが、時間が経つにつれ、徐々に恐怖と絶望、喪失感に襲われました。その後しばらくは、好きな絵を描くことも不謹慎に思えたり、絵を描くよりもすべきことがあるように思えたりして、自分が今まで描いた絵を見るのも嫌になりました。そのような葛藤の中さまざまな人と話すうちに、「この出来事を何らかの形で残さなくてはいけない」「美術の力で僕にもできることがあるかもしれない」と徐々に心の整理をつけていき、二年ほど経ってやっと実際に手を動かせるようになったんです。

そしてアメリカ・ウィスコンシン州にあるチェゼン美術館から「時間をかけて大きなものを描いてみませんか」と言われたとき、「あの日」を描く決心がつきました。ただ僕は「災害からの復興」という綺麗なだけの

のだとしたら、それは「美術」というものの力なのかもしれません。

「学校での美術教育について希望することはありますか？」

僕は、デザインも含めた美術とは「人の営み」そのものだと思うんです。身の回りにあるもののほとんどには、何らかの形で人間が関わっていて、そこには必ず美術の要素がある。少なくとも僕はそう考えています。例えば、赤いマグロの切り身パックに緑色のバランスを添えるのは、補色の組合せです。校庭に植えられた植物も、美しく見えるように植えられ、手入れされている。そう考えたら、美術と全く無縁なものなんてこの世の中にはない。ですから、学校の授業では美術室で絵を描くだけでなく、そういう視点で美術を捉えて欲しいし、広い意味での美術が学べる場であって欲しいですね。

「ご自身の作品をどんなふうに見てもらいたいですか？」

鑑賞の仕方は自由だと思います。あえて言うなら、バツと見て「手で描いてある！」と驚いてもらえればそれでいい。今は、コンピュータで何でもできる時代です。そんな時代に、手だけを使って細かく細かく描いていることが、絵に対する好奇心の入口になればいいと思います。

正直に言うとお、絵を描いている身でありながら僕自身はいわゆる「美術」と呼ばれるものにあまり関心がありませんでした。でも「誕生」の制作を通じて「やっぱり自分は絵を描くことが好きで、言葉にできない何かを伝えたいんだな」と再確認した気がします。もし僕が時間をかけてコツコツ描いた筆跡や色合いを通じて、何かが人の心に染み渡っていく

絵にはしたくはなかった。そこで、世界中のあらゆる災害と、そこから復興に至るまでの過程で起こるさまざまな汚い部分も含めた破壊と再生、そして生き物の営みや自然との共存といった大きく普遍的なテーマを描こうと決めました。

「美術館での公開制作だったことは作品に影響を与えましたか？」

それは大いにありました。「震災だけを描くわけじゃない」と頭では思っていたけど、最初はがれきりばかり描いていたんです。そして被災した方々がその絵を見てどう思うかと想像すると、手が動かなくなる。気持ち

「三年の間に起こったそうした出来事も作品に反映されていそうです。」

そうですね。「誕生」には制作過程の出来事がたくさん盛り込まれています。その日に見たものや、公開制作を見た子どもの一言で描いた部分もあるし、娘が生まれたことも描いています。個人的な日記みたいな感じもありますね(笑)。

個人的といえば、制作中に脱臼で右手が全く動かなくなつた時期があつたんです。ちょうど左上にある花の辺りを描いているときでした。その辺りはよく見ると線が震えていて、花の形もいびつなんです。慣れない左手で描くのは、想像以上に大変でした。しかし描いているうちに少



池田学

Profile:1973年佐賀県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。日本、カナダ、アメリカなどを拠点に、丸ペンとカラーインクを用いた細密画を数多く手がける。代表作はチェゼン美術館(アメリカ・ウィスコンシン州マディソン)での約3年間にわたる滞在制作で描かれた大作「誕生」など。現在マディソン在住。

題材「あの日を忘れない」については、こちらから。

池田さんのインタビュー動画(指導書収録予定)のダイジェスト版は、こちらから。



セレクトショップ

世界に一つしかない、自分のこだわりのお店

六年間の図画工作での学びの集大成として、自分だけのこだわりのお店をつくる題材に取り組んだ子どもたち。石井先生は、工夫するポイントを絞ることで、子どもたちが資質・能力を存分に発揮できるようにしています。「面白い」にこだわった、先生の取り組みについて伺いました。

兵庫県 芦屋市立打出浜小学校 石井 真里 先生



「自分の好きなもの」だから こだわられる

六年生では、図工での学びの集大成として立体の題材を設定しています。今回「セレクトショップ」にしたのは、子どもたちが自分の好きなものをつくれるので発想がしやすく、意欲が持続しやすいと考えたからです。ただ、それだけでは表現が深まらないので条件を提示しました。「一つは「今までにないようなお店」。これで自由に面白い想像を膨らませることができ、例えばスポーツ用品店ではなく、バット専門店。バットも本当にはないようないろいろなバットが考えられます。もう一つは「人がたくさん集まるお店」。商品だけでなく、展示の仕方や、色合い、人物のポーズなど、作品全体についてのこだわりも生まれます。

絞り込むことで深まる表現

今回、お店の外枠用の板と人物の芯材、班に一つずつ紙粘土

を用意しました。外枠や芯材を用意したのは、それ以外の、商品やディスプレイなどで表現を深めてほしかったからです。時間も限られているので、資質・能力を働かせてほしい点は明確にします。外枠を板にしたのは、紙の空き箱では強度も弱く、お店の奥行きも深くなりがちで、つくったものが見えにくくなるという理由もあります。

子どもたちは宿題でどんなお店がよいか考え、授業でアイデアスケッチをかきました。それを私がオーナーとして確認します。一対一で話すことで、商品や展示方法など、より構想を深めることができるようにしました。

外枠を組み立てたら、あとは自分で材料や用具を考えて表します。ここでは「もっと本物っぽくしないとお客さん来ないよ」と伝え、使う材料をよく考えるよう促しました。想像だからこそ細部にはこだわってほしいのです。子どもたちは材料コーナーから思い合う材料を探したり、持参したりして工夫を重ねていました。内装も絵の具で

授業の流れ



ハンバーガーは紙粘土で細部までこだわってつくっています。机は板を活用してより本物らしくしました。



友だちのお店とのコラボ商品は材料も参考にし、クラフトテープを活用。



おすすめの商品を絵に書いて、宣伝するプレートをつくりました。

指導計画

時間	分野
14時間	立体に表す

材料・用具
板材、芯材、軽量紙粘土、身辺材、電動糸のこぎり、はさみ、木工用接着剤 など

題材の目標

- 知識及び技能
セレクトショップを表す中で形や色などの造形的な特徴を理解し、表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに、材料や用具の経験を総合的に生かしたり方法を組み合わせたりして表し方を工夫して表す。
- 思考力、判断力、表現力等
形や色などの造形的な特徴を基に自分のイメージをもち、自分の好きなものなどから表したいセレクトショップを思い付き、形や色、材料の特徴、構成の美しさ、用途などを考えながらどのように主題を表すのか考える。
- 学びに向かう力、人間性等
主体的に自分のこだわりを込めたセレクトショップを、材料や用具を工夫して使いながら表す学習活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

Message



図工は自分の頭の中しかない言葉にならないものを形や色で表現する教科。これは、ほかの教科にはない特別な長だと思っています。私がそこで大切にしているのは「面白い」。心が動く要素の一つですが、笑って面白いと思えることはとても大事なこと。なので、どの題材でも「面白い」にこだわっています。子どもたちには図工室に来たら面白いこと

最後にはお店を紹介する いろいろな分野の要素が入る

かいたり包装紙で貼ったりといろいろな表現が出てきます。まさにこれまでの経験を生かし、自分の思いを実現するために資質・能力を発揮していたと思います。友だちの活動の様子を見ながら、「ディスプレイを参考にしたり」「コラボ商品をつくったりと、表現が交わっていく様子も見られました。

分野的には立体ですが、「お客さんがたくさん来る」ということを忘れないようにすることで、見られることを意識します。そういう意味では工作の要素もあります。絵に表す要素もあり、分野を横断した総合的な活動になったと感じています。

「面白い」を大切に、 日常のよさに気付く感性を育む



ができる、という気持ちをもってほしい。その先に、日常のちよつとしたことをきれいな、美しいなど思える感性の育みがあるのではないだろうか。ふと見上げた青空や、一枚の葉っぱにも「いいな」と思える感性を育て、大切にしながら生きていってほしいですね。

子どもたちのこだわりのお店はこちらから。





アートカードでよろしくね

本物の作品への興味を引き出す鑑賞授業

美術館や博物館などの文化施設に恵まれた地域にありながら、生徒たちが足を運ぶ機会の減っていることを危惧した貝原訓子先生が取り入れたのは、アートカードを使った鑑賞授業。先生お手製のアートカードで、鑑賞の目を育み、本物の作品への興味を引き出す工夫について伺いました。



宮城県 仙台市立桜丘中学校 貝原 訓子 先生

アートカードを鑑賞のきっかけに

授業で使うアートカードはすべて地元の宮城県美術館の所蔵作品で、私が美術館に許可を得て手づくりしたものです。今から十年ほど前、教職大学院に通っていた頃に、他の美術館でのアートカード実践を知ったことがきっかけでした。当時、仙台市内の中学校で美術館へ行く校外学習が減ってしまったことをもったいなく思っていて、何とか子どもたちに美術館へ行ってもらえるようにならないかと考えたのです。

アートカードの授業は、一年生の初めと夏休み前の二回行います。私は夏休みの宿題に美術館の鑑賞レポートを出します。まず、このアートカードで作品を知ってもらい、夏休みの宿題として、本物の作品を鑑賞してレポートを作成するのです。アートカードは八十枚でセット。四人ひと組で広げて見られるちょうどいい量です。

最初の授業では、今日の気分

気に入った作品を選んで、作品紹介を兼ねた自己紹介から始めます。
意見を伝え合える場であること
次はカードを二十枚にしほって、「音を探そうゲーム」や「ワクワクしている人を探そうゲーム」をします。ここでのねらいは、とにかく絵をじっくり見ってもらうこと。

中学一年生だと、友だちの作品を見ていいところを探すことはできませんが、よく分からない作家作品を見たときに、興味をもって何が描かれているか考えるとき、その作品について話すとかはまだまだ難しいのです。だからこの授業では、自分の思ったことを気軽に話せることができるように、相手の話を聞いたら、まず「なるほど」と言うように伝えます。自分の意見に「なるほど」と言ってもらったり、友だちの意見を聞いて「なるほど」と気付いたりするのが楽しいことだと知ってほしいのです。

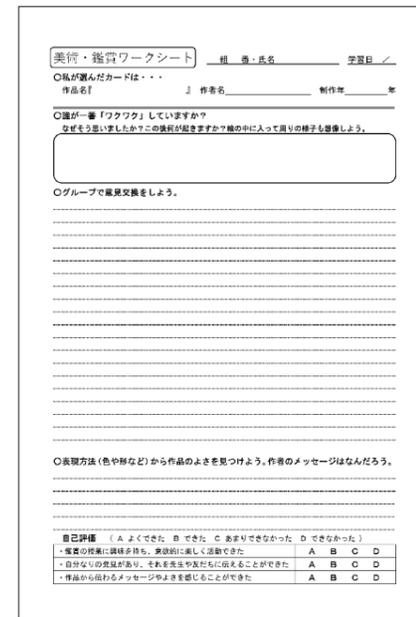
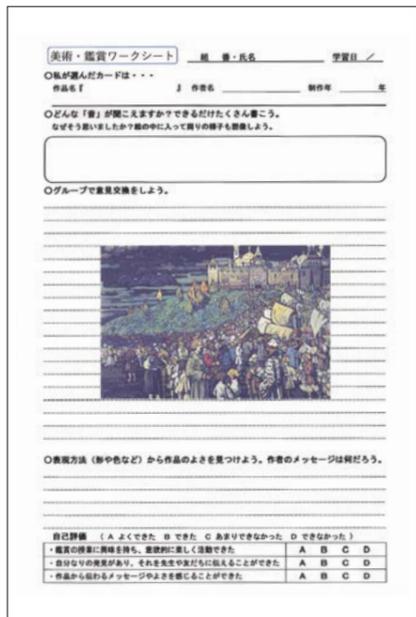
本物の作品を見に行ってしまう

夏休み前の授業は、主は夏休みに美術館に行くための事前学習が目的で、特に一年生は宮城県美術館の常設展に行ってもらうので、アートカードの中からの作品を見に行きたいか探してもらおうことをします。後は、美術館でのマナーや作品の見方、レポートのまとめ方などを伝えます。

夏休みのレポート作成は、三年生まで毎年行います。一年生のレポートには、「つまらなかつた」「どうしてこんな課題をしなければならぬのか」と率直な感想も多いですし、まとめ方や内容もぐちゃぐちゃ。それが

二年生になると、去年は気付かなかったけど、今年はこんなことに気付いたという新しい発見をする生徒も出てきますし、三年生になると、なぜこの作品を選んだのかを主張するようになるし、自分にとつての鑑賞活動の意味や自分の成長について書けるようになります。こういう宿題があるからでしょうが、みんな結構興味をもってくれます。授業とは別に見に行った作品について話に来る子もちらほらと出てきました。子どもたちは、本当は鑑賞が好きなんです。生徒たちには本物を見に行ってもらいたいですが、何より美術館の大切さを知ってほしいですね。

授業で使用するワークシート



音を探そうゲーム

自分が絵の中に入ったつもりになって、聞こえてくる音を想像する。絵には描かれていなくても、その周りにあるものまで考えさせる。アートカードとは別に、ワークシート上に置く小さなカードを用意して、絵の周囲に意見を書き込めるように工夫をしている。

ワクワクしている人を探そうゲーム

アートカードの作品の中で、明らかにワクワクしている人が描かれている絵は多くはない。絵の登場人物の様子から絵に描かれている瞬間の前後のストーリーまでイメージさせて、なぜワクワクしているのかを考えさせる。

指導計画

時間	領域
2時間	B鑑賞

材料・用具
アートカード、ワークシート

題材の目標

- 知識及び技能
アートカードに描かれている事象の形や色彩、イメージなどから受ける感情を理解し、作品の印象を捉える。
- 思考力、判断力、表現力等
アートカードに描かれる作品のよさや美しさを感じ取り、鑑賞する。互いに感じたことを言葉や文章で表現し伝え合うことで、多様な見方や考え方を広げる。
- 学びに向かう力、人間性等
アートカードの活動から美術館の所蔵作品に関心をもち、鑑賞活動の楽しさや価値を感じながら意欲的に取り組む。

Message

鑑賞には正解はありません。だからこそ自分が興味のない作品にも、世の中には価値があると思う人がいることを生徒に教えられますし、そうした価値観の違いを人と共有していくことの大切さを気付いてもらえる

美術が学べる環境を大事にしたい
のではないかと考えています。海外の研究者から「必修授業で図工や美術があるのは素晴らしいこと」と言われて、美術を学べる環境が当たり前でないことに気付かされました。生徒たちにも、美術の時間を大事にしてほしいと伝えていきます。



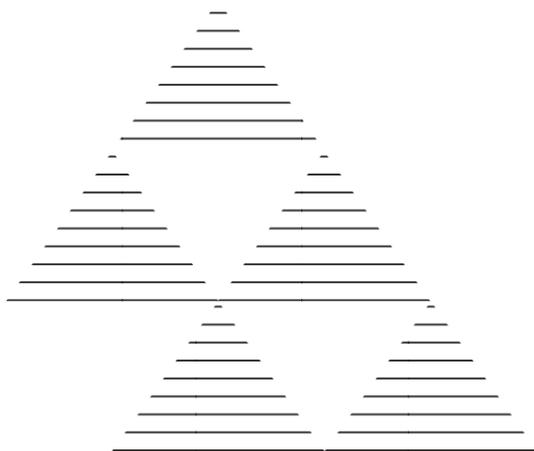
第二四回

教科書に載っている、あの作品。誰もが知っている作品や、初めて出会う作品。いつもの見方はいったん忘れて、一緒に新しい見方を試してみよう。それまで見えなかった作品の一面が、見えてくるかもしれません。

「教科書の絵」を考えてみる

緑響く

[紙本着色 / 84×116cm] 1982
長野県信濃美術館 東山魁夷館蔵
ひがしやまかい い
東山魁夷 [神奈川県・1908~99]



「教科書の絵」という言い方をお聞きになったことがあるでしょう。国民であれば誰もかかつて見たことがある絵です——だからその実物を見にきてください、という文脈で使われたりします。しかし実際には教科書は随時更新され、専門的な美術史の本でもない限り共通した「教科書の絵」なるものではありません。例えば一九五〇年代の図画工作や美術の教科書を見ても、技術と方法の指導を重視して、芸術家のつくった作品をそもそも掲載していないことだってあるのです。

そんなことよりもこの言い方がいやらしいのは、あたかも、教科書に載っているから名画だ、というよう

な本末転倒を含んでいるところですね。教科書に選ばれる理由とその絵の価値は、必ずしも合致しないかもしれない。市場でやりとりされることのない子どもの描いた絵と作家の作品が同列に並ぶ現在の教科書のレイアウトはそのことをよく示しているでしょう。

さて、今回は教科書の表紙に採用された東山魁夷作《緑響く》を取り上げます。なぜこの絵が、選ばれているのか。

東山の代表作の一つとされる作品です。鬱蒼と木々が繁った湖畔の森に一頭の白馬。これまで開催されてきた本当たにかくさんの東山魁夷展の

カタログを開くと、「清澄」「静謐」「叙情性」といった形容が符牒のように頻出します。まさしくその通りですから、ただ見る人にとっては(特に以前この絵をどこかで見たことがある人は)その符牒で満足でしょう。けれど教科書で学ぶ子どもは、それをさらに問い返さねばなりません。どうして清澄で、静謐で、叙情的なのか。

「清澄」で「静謐」なのは、波一つない水面の効果でしょう。そして、完全に上下対称、しかも画面を縦に二等分したときの右側のびったり中央に白馬を置いた構図、まっすぐ生えそろうた木々、ほぼ全面に同系色で塗り込めた構成、これらの特徴はどれも静かな印象に結びついています(これは一方で、単調で平板だ、とも言えます)。「叙情性」は、非現実的な白馬の存在、岩絵具ならではの粉っぽい質感、そして波長の短い(つまりちよっと遠くに感じる)青緑色に由来するでしょう。不安や違和感なく、視線を大きく動かすことなく楽に眺められる安心感、あるいは、分かりやすさ、それがこの絵が教科書に選ばれる理由だと僕は推測します。

東山は、日本画の世界に西欧のロマン主義を持ち込むことでそれまで

になかった風景表現を開拓した画家ですが、そうした歴史的な文脈を抜きに絵だけを吟味するならば、図版の上に書き込んだり、線を引いたりして解剖するほかにありません。使ったこそ教科書の絵ですからね。少なくとも、豊かな自然、水面、静けさ、白馬、といった、あらかじめきれいであることが決められているような要素だけで、子どもが思考を停止して「きれいな絵」と判断することのないように導くことが指導者に求められます。これはなかなか、手強いですよ。

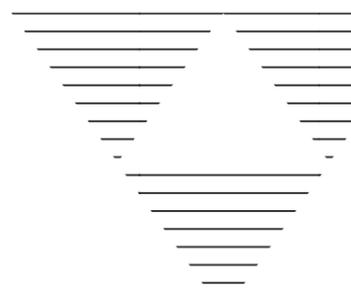
成相 肇 なりあい・はじめ

東京ステーションギャラリー学芸員。
一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員を経て、二〇一二年から現職。
主な企画展に「石子順造の世界」(ディスカバー)、ディスカバー「ジャパン」(パロディ)、二重の扉」など。

〈今年のおとまり〉……小学生の頃は毎日虫を捕ってばかりいた田舎少年でしたが、結局今でも子どもが捕ってくる昆虫の飼育が日々の楽しみです。羽化や変態の瞬間を見られる喜びはひとしお、甲虫は亡骸になってからも簡単に標本にできるのがいいですね。今年は初めてナナフシモドキを育ててみてください。



東京ステーションギャラリー展覧会情報
「神田日勝 大地への筆触」
(二〇二〇年四月一八日~六月二八日)
※予定



中学生の 私の見方

生活の中にあるものや身の回りの風景などから、中学生はどのような美しさを感じているのでしょうか。新しい教科書の特設企画「あなたの美を見つけて」では、生徒一人一人が見つけた美を写真と言葉で紹介しています。



令和3年度版 中学校教科書 美術2・3上 P.6-7 「あなたの美を見つけて」



葉っぱの隙間から見える空が
ぎざぎざだった。

見方を変えることで生まれる面白さに
着目しています。



見た目は壊れたボールだが、これのおかげで、
家族が笑顔になれる場面があった。

心に残る思い出を重ねることで、
独特のよさが感じられます。

生徒の多様な
見方や感じ方を
大切にしています。

小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。



小学校図画工作科教科書



中学校美術科教科書



高等学校芸術科美術教科書

ひらけ!

ミュージアム・
エデュケーション
トピラ

横浜美術館 鑑賞授業案（中学校） 授業のための中学校・美術館合同研究会

教育普及（ミュージアム・エデュケーション）とは、美術館や博物館で展示と並行して行われている、美術や文化を主体的に学ぶことを支援するためのさまざまなプログラムのことです。今回は、中学校の先生と連携して鑑賞教育の授業案づくりを行う「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」について、横浜美術館主任エデュケーターの端山さんにお話を伺いました。

美術館の根幹は教育であるはず。二〇一六年より始まった「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」では、教育委員会の協力のもと、横浜市内の中学校の先生と当館のエデュケーターが一緒になって鑑賞授業案を作成します。当館は小学生や大人の造形体験を主とした活動は充実していましたが、中高生とのかかわりが少なく、その世代をターゲットにした活動を拡充させることが課題となっていました。また私自身、以前から「教育という観点で美術館の活動を発想できないか」と模索していたこともあり、所蔵作品を授業に活用してもらうことを考えたのです。

先生の発想に触れ、共有する喜び。活動の開始は毎年五月頃から。二、三名の先生とエデュケーター一名でグループを編成し、三グループほどで授業案を検討していきます。その後は段階的に協議を重ね、十二月に発表と検討会を行う、という流れです。検討会では一般参加の教員も交え、さまざまな角度から議論が交わされるのも見どころですね。作品については、私たちエデュケーターが絵画や写真、彫刻など、当館のコレクションから十二点ほど厳選し、グループごとに題材を選んでいただきます。作品に関する背景や手法など専門的な情報を私たちが提供しながら進めていますが、興味深いのは、先生方の作品を見る視点が私たちとは大きく違うこと。生徒たちと向き合う現場を軸に発想する先生方の思考には、常に新たな気付きを与えられます。例えば「ペルリ提督横浜上陸の図」という作品は、当初は美術の鑑賞題材には不向きと思いましたが、先生

方と一緒に調べていく中で、私自身が気付かなかった魅力を探求でき、授業案の作成を機に展示会まで開催することになりました。お互いに話し合い、接点を見付け、授業案の精度を深めていく作業は何よりやりがいを感じます。途中で事前授業も挟み、改善を加えながらつくり上げるこの授業案を、一つの方向性として鑑賞授業の参考にしてもらえたらうれしいですね。



端山聡子
横浜美術館
教育普及グループ
チームリーダー/
主任エデュケーター/
主任学芸員



撮影：笠木靖之
横浜美術館
神奈川県横浜市西区みなとみらい
3丁目4番1号
TEL.045-221-0300
https://yokohama.art.museum



発表会での吉田先生。

二〇一七年度の研究会より「黒」をみつめてく奥深い「黒」の魅力にせまろう。題材作品は長谷川潔「草花とアカリヨム」で、図録では伝わりにくいモノトーンの繊細な表現や質感に迫る鑑賞の授業を考えました。横浜美術館では、この作品の技法であるメソチントを実際に体験することができ、技法によって生まれる「黒」の美しさに感動しました。そこから、授業でもいろいろな描画材と紙を用いて黒を表現する導入から始め、作品に用いられる黒の印象や効果について鑑賞を深められるようにしました。鑑賞を突き詰めていくほど、生徒は「本物を見ないと分からない」というモヤモヤに直面しますが、そうした思いが美術館へ足を運ぶきっかけになればと思っています。（横浜国立大学立篠原中学校 吉田浩気先生）